

史の發生、歴史の媒介としての詩歌、回教曆第二世紀の史家、第三世紀の史家、第四世紀の史家、それ以後の史家の八講に分たれて居る。圓熟した老大家の著作として興味深く讀まれたが、何しろ講演であるためにエピソードが全體の眞數の割に稍々多きに過ぎ、且つ卷末に進むに従つて、記述が簡略となり、ために或は逸すべからざる名が見當らず、或は僅かの記述のみで割愛されたのは甚だ遺憾である。例へば Krenner により「イスラームの Herodotus」、Brockmann により「光榮あるイスラーム文化の正しき子」との讃辭を得た Mas'ud の如きはその一人かと思はれる。「岡島」六・五・三〇

● 地 誌 學

東木龍七著

地理學の研究は大體に於て自然地理と人文地理及び地誌の三つの部門に分けて考へられてゐる。これ等の中、地誌の地理學研究上に於ける位置については學者によつて異論のある所であるが、概近この方面に關する研究が著しく世の注意を惹いてきた事は事實である。即ちある地域の地理的事象を分拆綜合して記載する地域論的研究の

勃興之である。しかしてこゝに地誌學と云ふのはその方法を攻究することを目的としてゐるのであるが、從來の所謂地誌なる語の概念を以て直ちに想到せらるゝ所の地誌學ではなくして、著者が以前より唱導してゐる微地形學的研究方針に基いて從來廣く地誌學的現象として認められてゐる諸事象を研究せんとしたものである。従つてこの點からして筆者が自ら斷つてゐる如くその内容より云ふ時は微地誌學と稱するを適當とするかも知れない。

本書の内容は地誌學要素の研究法と地誌學地域論の二つに大別され前者は地誌學研究法、土地性質論、地誌系統論、後者は侵蝕面、扇狀地三角洲面の低位系統及び山地丘陵地、微扇狀地面の高位系統に於ける料地經營と住居經營とが論述してある。この研究法及び理論の理解を容易にすべき例題についてはその撰擇は極めて容易でないにかゝはらず、著者自らの巡檢の外、廣く内外の文獻を涉獵して之によつて研究法に立脚せる適切な説明が施され、特に研究法については内外の諸説を參酌して作れる案を一々我が國の事實によつて吟味を試みたる等、そ

の慎重なる用意の程がうかゞはれる。勿論、箇々の點については云ふべき事もあらうが、未だ何人も試みざりしこの方面に開拓の鋤を執り地誌學の體系にふれたる著者の努力に敬意を表し、且つ最近翻譯の地理學書の多き中に研究資料を我が國に取れる獨自の有益な研究が現はれたることを學界のために喜ぶものである。著者は東京帝國大學理學部地理學教室に於ける篤學の士である。(菊版六一七頁、東京、古今書院發行、價、五圓五拾錢)(岩根)

彙報

● 京都帝國大學文學部史學科
本學年講義題目

國史	國史概説(第一學期)	每週
講義種別	普通	四
	三浦教授	
	西田教授	二
特殊	國史概説	
	西田教授	二
	日本近世史の特殊問題	
	中村助教授	二
	日本中世の古文書	

東洋史	喜田講師	古代民族史(第二學期)	(二〇)
普通	藤 講師	中世史料の研究	二
	三品講師	古代日鮮關係史	二
	講師未定	明治維新史	(四〇)
演習	三浦教授	文化の階級性(第一學期)	二
	西田教授	日本文化史	一
東洋史	矢野教授	東洋史概説(第一部)	二
普通	羽田教授	東洋史概説(第二部)	二
	矢野教授	近代ロシア支那關係	二
特殊	羽田教授	唐代の西域	二
	那波助教授	漢代の文化	二
	鴛淵講師	明代の滿洲	二
演習	矢野教授	東洋史の諸問題	一
	羽田教授	東洋史の諸問題	一
西洋史	原(隨)助教授	西洋史概説(第一部)	三
普通	時野谷助教授	西洋史概説(第二部)	一